

戦後労働運動のメディアとしての幻灯

— 一日鋼室蘭争議における運用を中心に —

鷺 谷 花

1. 戦後教育・社会運動における幻灯の活用

「幻灯」とは、「光源とレンズを用いて透明な媒体にしるされたイメージを静止画像としてスクリーンに拡大映写する装置」であると、ひとまず定義することができる。日本におけるこの装置の歴史は古く、18世紀にオランダから輸入されたものが、「写し絵」（関西では「錦影絵」）の名称のもと、演芸・娯楽として親しまれた。また、明治初期に欧米から再輸入された同種の機器は、西洋での名称である“*Laterna Magica*”（羅）もしくは“*Magic Lantern*”（英）を直訳した「幻灯」の名称を与えられ、官の主導もあって、家庭、学校、官庁、公共機関における視覚教育装置として広く活用された。

日本においていずれも独自の発展をとげ、広く普及した「写し絵」「幻灯」は、20世紀初頭からの映画の急速な発展のかたわら、社会的・大衆のメディアとしての存在感を失ってゆく。大正期には主要都市における写し絵の興行は衰退し、幻灯の利用も、子ども向けの光学玩具、美術教育、宗教教育、学会発表等の用途に限定されていった。

しかし、1930年代前半から、幻灯の教育的効果および外国におけるその活用に注目した一部の教育者及び文部官僚により、教育現場への幻灯の再導入に向けた働きかけが開始され、戦時体制への移行とともに、幻灯は国策宣伝メディアとして本格的復興をとげた。

1941年、文部省は「農山漁村等交通不便ニシテ文化施設ニ乏シキ地方ニ対シ科学知識ヲ普及シ以テ国防ノ充実、産業ノ開発ニ関スル国策ノ徹底ニ資シ併セテ教科的目的ヲ達成スル」ことを目的として、幻灯機の規格制定及び幻灯フィルムの製作、幻灯の教育的利用に関する調査研究及び指導に取り組む方針を表明する。この方針に基づき、従来の1枚毎に分かれたガラスの種板（スライド）式の幻灯に替わって、1コマ横32mm×縦24mmの画面を35mm映画用フィルム上に接続し、スライドさせて1コマずつ映写する幻灯機が、文部省により標準規格として採用され、以後、戦後1970年代に至るまで、日本ではもっとも一般的な規格として普及した。

戦時中、農山漁村向けの国策教育や、軍隊及び軍需工場における技術・産業教育の目的で、国産幻灯機及び幻灯フィルムの製作と頒布が進められたことは、日本敗戦後の幻灯の飛躍的な再発展へとつながった。視聴覚教育を重視した占領政策のもと、幻灯は映画、紙芝居と並ぶ重要な視覚教育メディアとして位置づけられ、とりわけ学校教育における教材としてめざましく需要を拡大した。

占領初期に市販されていた幻灯は、世界名作文学や童話等のプロットをダイジェストし

て幻灯化した、レクリエーション向けの「物語もの」が大半だったが、それらの教材としての質や使い勝手に不満をもつ学校関係者たちにより、教材幻灯の自主製作が試みられるようになった。占領期を通じて、こうした教育者による幻灯の自主製作・自主上映活動は急速に普及し、雑誌や講演会を通じたノウハウの交換や、自作幻灯コンクールの開催等が活況を呈した。

学校教育のみならず、社会教育の場でも幻灯の利用は積極的に推進された。占領初期から、幻灯は労働教育のメディアとしても重視されていたことは、1947年に労働省が開催した「労働教育展覧会」には、「労働教育幻灯フィルム」の展示が設けられ、展示リストには1946年4月の戦後初の総選挙に際して頒布された幻灯『正しい選挙』（製作：FFD株式会社）はじめ、新憲法解説、民主主義啓蒙、産業教育などの内容の幻灯フィルム18本のタイトルが記載されていることから確認できる。このように、占領期を通じ、労働省は労働教育における積極的な幻灯の活用を呼びかけており、「労働組合の教育担当者や労政職員で実際に自作幻灯を利用しておられる人々からの屢次の技術的質問に答える為に」、幻灯自作のノウハウをまとめたパンフレット『幻灯画の作り方』を1951年に刊行している。こうした官庁主導の幻灯利用促進の一方で、労働者組合の活動家による幻灯の自主製作も、かなり早い段階から実践されており、たとえば、東芝争議の渦中の1949年4月には、組合によって「幻灯マンガ」『白足袋一家 なぐりこみの巻』（製作：東芝労働組合連合会、脚本：マツダペンクラブ、作画：マツダパレットクラブ、撮影：マツダフォトクラブ）が自主製作されている。

占領後期のいわゆる「逆コース」化とレッド・パージのさなか、労働運動をはじめ社会運動の活動家による幻灯の製作・上映活動は一時停滞するが、連合軍による日本占領が終結に向かう1952年前後、社会運動の再度の活性化とともに、幻灯も盛んに活用されるようになる。雑誌『ソヴェト映画』1952年12月号に掲載された、さかざき・つねろうの記事「富士よ怒れ!! 日本の幻灯活動の展望」は、戦後の社会運動における幻灯製作・上映運動の歴史と現状を概括し、労働組合はじめ社会運動団体による幻灯の自主製作・上映運動が活性化したきっかけは、「自主映画の製作運動が映画サークル、労働組合その他の民主的な団体の協力のもとにもりあがってくると、映画観客の組織的な動員のために幻灯フィルムの必要さがとえられ、『どっこい生きてる』『母なれば女なれば』『箱根風雲録』『山びこ学校』などの幻灯化がおこなわれて、それらの映画が公開されるよりもはや、映画サークルなどの手で大衆のなかえ〔原文ママ〕もちこまれた^{iv}」ことだったと記している。

さかざきのこの記述の裏付けとなるようなひとつの事件が、最高裁事務総局発行『労働関係刑事事件判例集』に記録されている。「無許可幻灯映写会事件」と名付けられたこの事件の内容は、1951年12月26日に、「会社社宅内の私設道路上において、映画「どっこい生きてる」の宣伝用幻灯の映写会を催し、幻灯機の操作及び画面の説明を行ったことにより、「昭和二十五年札幌市条例第四十九号集会集団及集団示威行動に関する条例第一条、第五条に違反した」として3名が公訴されたもので、結局、「被告人等の右幻灯機

映写の所為はせいぜいのところ、街路上での子供の慰安に供せられる紙芝居類似のもので、これにより地方公共の安寧若しくは秩序を妨げるおそれはなかったものと認められ、1957年7月19日に札幌地裁で無罪判決を受けている。この事件は、1951年当時、観客を集め、幻灯化された独立プロ映画を上映する営為が、社会の現状に異議を申し立てる「運動」としての意味をもち、当局による警戒の対象となっていたことを示すものといえる。

さかざきによれば、1952年5月1日の占領解除後初のメーデーにおいて、皇居前広場を占拠しようとしたメーデー隊と警官隊が衝突し、死者2名と多数の負傷者、逮捕者を出したいわゆる「血のメーデー事件」の2週間後に製作された幻灯『行け！人民広場え〔原文ママ〕一血のメーデー記録』（製作・配給：日本幻灯文化社、1952年）が、社会運動の当事者による幻灯自主製作活動の嚆矢となったという。この幻灯は、メーデー参加者たちの撮影した数百枚の現場写真を選定・編集し、「各地の文化サークルや詩人集団のつくった詩、ルポルターージュをもとに」書かれた解説を付して完成したとされる。また、同年には、戦時中から農山漁村向けに増産や生活改善のための教育用幻灯を製作してきた農山漁村文化協会（農文協）が、前年に青銅社より刊行されてベストセラーになっていた『山びこ学校』を、現地山元村でのロケーション撮影と、無着成恭及び生徒たち本人の出演により幻灯化している。1952年前後、幻灯が「教育」のメディアであるのみならず、「社会問題」を記録し、その解決に向けた何らかのアクションを呼びかける「運動」のメディアとしての存在意義をも確立しつつあったことが、これらの事例からは確認できるだろう。

占領終結とレッド・パージの終息を経て、大規模な労働争議が頻発する中、幻灯はピラや壁新聞、合唱などと並ぶ重要なメディアとして、労働組合による教育宣伝活動に大いに活用された。しかし、昭和期の幻灯それ自身が、従来は学術的調査・研究の対象とされてこなかったことに加えて、労働組合をはじめ各種社会運動団体が自主製作した幻灯は、学校及び社会教育向けの教材幻灯に比べて、流通量と範囲が限られていたこともあり、これを歴史的資料として収集・保存・整理・公開する試みはほとんどなく、現状では一次・二次資料の劣化・散逸が深刻な状況にある。

筆者は2011年度以降、早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点公募研究「戦後映像文化史におけるオルタナティブ的实践についての実証的研究——幻灯／スライドメディアの再評価及び映画・演劇界との連携の実態の検証を中心に——」（2011年度）、及び「〔映画以後〕の幻灯史に関する基礎的研究」（2012年度）の研究チームの一員として、主に大阪国際児童文学館及び神戸映画資料館に所蔵されている占領期以降の幻灯のフィルム及び台本のコレクションの整理・調査に取り組んできた。

〔改段〕本論文においては、神戸映画資料館の所蔵する戦後の社会運動に関連する幻灯のコレクションのうち、日本製鋼室蘭製作所（日鋼室蘭）で1954年7月から年末にかけて起こった大規模な労働争議の全課程を記録した『日鋼室蘭首切反対斗争記録 嵐ふきすさぶとも』全2巻（製作：日鋼室蘭労働組合教宣部、脚本・構成：久保田俊夫、写真：郷六博ほか写真班）を取り上げ、現地室蘭における調査結果と併せて、今日ではほとんど知られるところのない、戦後の労働運動における幻灯の運用の実態に光を当てることを試

みる。

2. 日鋼室蘭争議における幻灯活動

先述したように、占領期からすでに労働争議の一環としての労働組合による幻灯自主製作は行われていたものの、占領終結後の労働運動における「幻灯ブーム」というべき現象の直接のきっかけは、1952年10月から12月にかけての、日本炭鉱労働組合（炭労）による63日間の賃上げ要求ストライキの妥結直後に製作された『われらかく斗う 激斗63日』（製作：日本炭鉱労働組合、配給：日本幻灯文化社、1953年）だったとされる。この『激斗63日』については、当時、社会運動に関連する幻灯自主製作のサポート及び配給を一手に引き受けていた専門業者である日本幻灯文化株式会社が1959年に発行したパンフレット「労働組合の幻灯活動」（神戸映画資料館蔵）に、次のような記述がある。

労組が幻灯活動を初めてからすでに十年をこえる。戦後の荒廃の中で組合の活動家たちは子どもたちに“明るく健康な文化を！”と願って社宅に、地域に幻灯をもちこみながら組合員の家族や近所のおかみさんたちとの連りを強めていった。

炭労や国鉄などが、家族の組織や労農提携を真剣にとりあげるようになって、こうした幻灯活動は一そう広がっていった。作品としては、日本の民話や中ソをはじめとする世界の童話や、独立プロの映画を幻灯にしたものが多く使われていた。

幻灯がこのような文化活動の分野から、組合の教宣活動の方へも広がってゆくきっかけとなったのは炭労による幻灯“激斗六十三日”の製作である。

昭和二十七年の炭労の大斗争の中で作られたこの幻灯は、千本以上もプリントされ、それらがただちに全国各地で上映されて宣伝の大きな役割を果たした。

この経験から、自分達のたたかいを広め発展させてゆく直接の武器として、幻灯を製作し利用することを、多くの組合が考えるようになった。

十六ミリ映画の分野でも、既成の作品を見せる運動から、労働者階級が自らの立場で製作し上映するという運動が今、前面に押し出されてきているが、幻灯は製作が手軽なので、その^{vii}ことが早くからはじめられ、最近ではそれが幻灯の主たる活動になっているわけである。

あるいは、『激斗63日』の説明台本巻末には、「自分たちの闘い、記録・物語りなどを幻灯にして職場や家庭で映したら、どんなにみんなからよろこばれ、それが教宣活動に役立つことでしょう」「幻灯のフィルムは映画のようにお金もあまりかゝらずどこでも出来ます」「さらに職場や地域の写真・絵画・文学・映画・演劇班などが組合の指導のもとに力をあわせて作ったら素晴らしいものが出来ることうけあいです」といった、配給元の日本幻灯文化社からの宣伝文が掲載されている。^{viii}

この文章にみるように、1950年代、幻灯は誰にでも作り、上映することのできる映像

メディアとして、労働運動の現場に浸透していった。たとえば失業対策事業で日雇い労働者に携わるいわゆる「ニコヨン」労働者が、苦しい生活と労働の実態を訴えるために自主製作した幻灯『にこよん』（製作：全日自労働田橋自由労働組合、脚本・撮影：舛谷新太郎、1956年）の例に見るように、幻灯はもっとも貧しい労働者にも手の届く表現・宣伝手段だった。また、『にこよん』が国内各所で上映されたほか、「ソヴェト、中国、インド、世界母親大会にそれぞれ一本ずつ送りました。中国からは、それに対して写真や手紙等、沢山のお礼が来^{ix}ました。」との報告があるように、当時、国際的な上映ネットワークが存在していたことも確認できる。

このように、1950年代から60年代にかけ、労働組合の活動や労働争議、あるいは労働者の日々の生活や労働を記録し、そうした体験を外部に伝え、共有する目的で、数多くの幻灯が、労働者自身の手によって作られていた。その中でも、日鋼室蘭労組の『嵐ふきすさぶとも』は際立った作品とみなされていたらしい。たとえば、当時、幻灯の製作にも携わっていたドキュメンタリー映画作家の谷川義雄は、「私は随分かず多くのスライドをみてきましたが、胸をしめつけられる感動をうけたことはこの作品がはじめての経験でした」と絶賛^xしている。また、総評が1956年に主催した講習会の記録『現代文化講座』には、配給を担当した日本幻灯文化社の社員の、「日鋼室蘭の幻灯は素晴らしい評判でした。いままで幻灯を馬鹿にしていたという神奈川鶴見の国鉄の労働者は『はずかしいけど涙が出た…』また、東京の日通両国支部では幻灯をみて『さっそくカンパしようじゃないか』と決められました」という発言が再録^{xi}されている。日本共産党中央委員会が1957年に発行した『宣伝の手引』下巻の、「幻灯活動のやり方とつくり方」と題する章においても、「一九五五年春の、労働組合の自作作品コンクールで入選した、「嵐吹きすさぶとも」が優れていたのは、日鋼室蘭のたたかいが、すべての労働者階級の運命につながっていたからであり、また幻灯が、たたかいを正しく伝えていたからでしょう^{xii}」と、やはり労働争議記録幻灯を代表する作品として紹介されている。

『嵐ふきすさぶとも』2巻が同時代に得た反響の大きさのみならず、労働運動の中での幻灯の運用の実態に関する比較的豊富な情報が残されている点も、日鋼室蘭労働組合の幻灯活動の注目すべき点といえる。争議当時の労組教宣部長だった広田義治氏の保管していた膨大な争議関連資料のうちには、当時の文化工作隊（文工隊）の活動報告書^{xiii}が含まれており、1954年7月4日から8月27日までの全活動が記録されているが、そこには連日のように社宅を回って行われていた幻灯の上映活動についても、上映タイトル、会場、観客の反応、文工隊員の意見・感想などが書き込まれており、現状では他に例のない貴重な資料といえる。また、広田義治氏による詳細な争議の記録『1954年日鋼室蘭闘争の記録 日鋼労働者と主婦の青春 私説日鋼室蘭闘争史』上・下巻（光陽出版社、2001年）には、『嵐ふきすさぶとも』の製作プロセスについても詳述されており、これらの情報を参照することにより、当時の幻灯の上映・製作の具体的な状況について、かなり詳しく把握することができる。

ここで、日鋼室蘭争議に至る経緯を概括しておこう。1907年に創業、敗戦までは日本

最大の民間軍需工場だった日本製鋼室蘭製作所（日鋼室蘭）は、敗戦後の民需工場への転換に際して苦闘を余儀なくされるが、朝鮮戦争時の特需景気下、在日米軍のいわゆるPD工場として兵器製造を再開、急成長に転じる。しかし、朝鮮戦争終結後の特需後退とデフレ・緊縮財政の進展により、再度の経営危機を予測した日鋼経営陣は、大規模な企業合理化案を決意し、1954年6月18日、日鋼室蘭の3742名の従業員のうち915名を指名解雇する方針を発表した。これに対して日鋼室蘭労働組合は、「一人の首切りも出さない」ゼロ闘争を決意、日鋼労連から独立して単独闘争の態勢を固める。6月下旬に同じく三井資本系列下の北海道三井炭鉱労組連合会（北三連）のオルグが来蘭し、前年に大量指名解雇の撤回を勝ち取った「英雄なき113日の闘い」と呼ばれた三井鉱山争議の経験と戦術を伝えたことをきっかけに、組合員の士気と自信は高揚する。三井三池争議に学んで、青年行動隊及び主婦の会が結成され、その後の争議において重要な役割を担うことになった。

7月5日には総評、鉄鋼労連、鉄連道地協、富士鉄、全動労協、道炭労、室蘭地協の参加により「日鋼首切り反対共同闘争委員会」（共闘）が結成され、当時の高野実事務局長体制下の総評が、労働運動指導の基本方針としていた「家族ぐるみ」「地域ぐるみ」闘争の態勢が整う。7月8日、会社側は本日限りの解雇通告書を指名解雇対象者に一斉送付するが、青年行動隊がすべて回収、未開封のまま郵便配達員に返上した。7月21日に再度郵送された解雇通告書も同様の結果に終わったところで、会社側は工場正門と裏門にバリケードを築き、ロックアウトを強行、以後、労使は全面的な闘争に突入した。

9月下旬、組合執行部の掲げるゼロ闘争の貫徹に反対し、解雇人員を784名に減らす会社側最終案の受諾を求める一部の組合員が、「日本製鋼室蘭製作所新労働組合」（第二組合）を結成、組合は分裂する。組合分裂後、「団結」の赤鉢巻を巻いた第一組合は「赤組」、「再建」の青鉢巻を巻いた第二組合は「青組」と呼ばれ、自殺者1名、負傷者多数を出す激しいぶつかり合い、切り崩しの押収をくり広げた。

組合分裂以降も、第一組合の「家族ぐるみ」の争議は4ヶ月にわたって継続され、全国からも多くの支援が寄せられた。しかし、新たに希望退職者を募集し、希望退職者がゼロだった場合も、会社最終案で示された解雇人員の中から、さらに100名の解雇を取り消すことを骨子とする中央労働委員会（中労委）の斡旋案の受諾が、12月26日の「涙の全員大会」によって決定され、197日間の争議は終結した。

会社の大量解雇方針が表沙汰になる以前、日鋼室蘭労組がさして活動的な組合ではなかったことは、当時から複数の関係者が指摘している。にもかかわらず、組合が短期間のうちに闘争態勢を整え、途中、第二組合の分裂と争議離脱を経ながらも、長期間の争議を敢行し得た要因としては、長屋形式の社宅街にほとんどの従業員が集住している室蘭独自の社宅共同体の環境と共に、文化工作隊による教宣活動の果たした役割も大きかったとされる。6月19日の北三連オルグ来訪まで、日鋼室蘭には「労働歌を歌う人間などいなかった」との証言があるが、このとき北三連オルグ隊員から『民族独立行動隊の歌』をはじめとする合唱指導を受けたことで、団結と闘争のための労働歌の重要性が強く実感されたと

いう。7月以降、新たに結成された文化工作隊の隊員は、工場の昼休みや、退勤後の社宅回りなどで『民独の歌』『同志よ固く結べ』『赤旗の歌』などの合唱指導に精力的に取り組み、「難しいことを言うよりも労働歌の合唱のほうが、大いに斗争意欲の盛り上がり役に立つことを発見した」。

合唱指導と並行して、社宅街での幻灯会も毎晩のように開催され、前年に三井炭鉱労組が指名解雇全面撤回を勝ち取ったいわゆる「英雄なき113日の闘い」を記録した幻灯『三井炭鉱首切り反対斗争の記録 地底の怒り』（全国三井炭鉱労働組合連合会〔三鉱連〕製作、日本幻灯文化社協力、1953年）をはじめ、3～4本の幻灯フィルムが繰り返し上映されていた。先述した「活動報告書」にある最初の幻灯会は7月11日に開催され、『地底の怒り』ほか3本が上映された結果、「三鉱連の闘いを実際に見て大きな感激を与えたと思われる。出来るだけ多くの人に見せる機会を与えることは絶対に必要だ。やはり幻灯燈を設置しなければならないと思う」と報告されている。『地底の怒り』に対する観客の反応はとりわけ大きかった模様で、以後も「一脈相通じるところがあると見えて共鳴のささやきも見られた」（7月14日付）といった報告が散見される。

幻灯上映活動が好評を得たことは、ただちに自主製作への要請へと結びつく。8月5日付の「活動報告書」には、準備期間と人手を要する映画会に対し、「むしろ現状では幻灯の方にもっと力を入れるべきであると思う。決して映画に本質的に劣るものではない」とされ、8月20日には、「幻灯も早く日鋼斗争をテーマにしたものをつくり、外部団体に情勢をうったえ、更に強い応援も可能ではないだろうか」との意見が表明されている。

こうした要請を受け、日鋼室蘭製作所の沿革から始まり、争議の全課程を、写真とテキストによって克明に記録する幻灯『日鋼室蘭首切反対斗争記録 嵐ふきすさぶとも』第1巻の製作は、8月中旬に開始された。製作の中心となったのは、争議以前から文学サークル活動や平和運動に積極的に関わっていた教宣部員の久保田俊夫氏（故人）だった。第1巻・第2巻ともに、シナリオの執筆及び、郷六博氏ほか約10名の写真班が撮影した多数の記録写真から使用写真を選定、構成する役割は、もっぱら久保田氏が担当した^{xvi}。第1巻の完成は9月下旬、第一組合と第二組合が分裂する直前だったとされる。〔ツメる〕第2巻の製作は、第一組合と第二組合の分裂と衝突の渦中で開始され、争議妥結を決定した「涙の全員大会」の約1ヶ月後の1月20日に完成した。

広田義治氏の回想によれば、第2巻は、第二組合の分裂による動揺を克服しうる団結心と闘争心を第一組合員に与え、さらには、9月以降、全国に派遣されたオルグ隊に運用させることで、カンパ・支援を集めて、組合員の生活対策の一助となることを期待して製作されたというが、「そもそもこの幻灯編集のころは中央交渉に舞台が移り、“正月返上”と現地室蘭の結束を一層固め、さらに全国オルグ展開の武器にとの意図であった。が、編集中に事態は急転、斡旋案受諾^{xviii}となって斗争は一応のけりをつき、日本幻灯文化社に依頼したのは年明けになった」。結局第2巻は当初の製作目的とは異なり、争議妥結後の報告・感謝オルグにもっぱら活用されることとなったが、すでに全国的に日鋼室蘭争議が注目を集めていたこともあり、先述したように、各地で大きな反響を得ている。

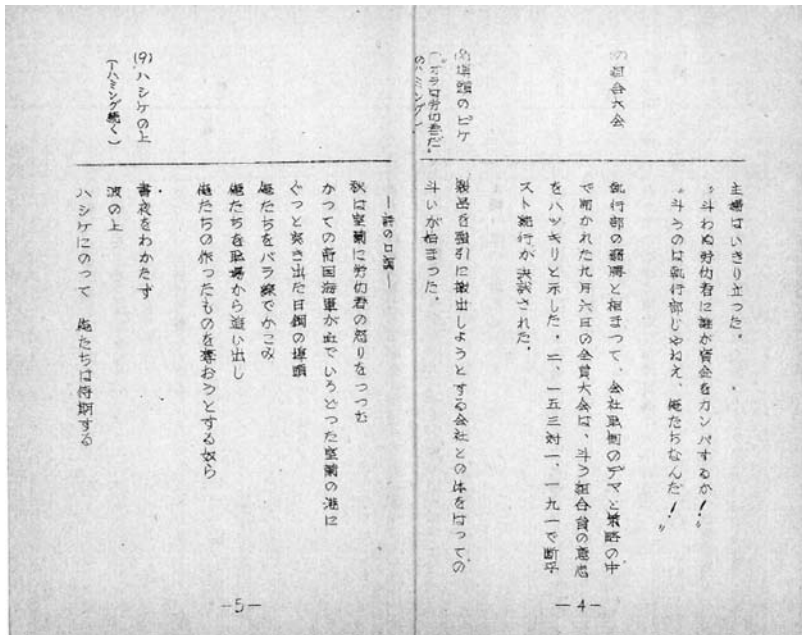
日鋼室蘭争議において幻灯というメディアが果たした役割については、争議妥結後、「大衆討議のタタキ台」として、第一組合執行部が起草した「首切反対斗争自己批判について」にて、以下のように総括されている。

ロ、行動を起こすための教宣活動

闘いの意義は行動のなかから理解される。いかに高度な理論や立派なスローガンを並べたててもそれだけでは行動にならない。敵の攻撃に対して直ちに行動を起こさなければならぬ。このために行動のスローガンとして、三鉱連の同志がうちたてた“去るも地獄、残るも地獄”を採用して大きくアピールすると共にその裏付けとして、百十三日の激斗の中で行った炭鉱労働者とその主婦たちの行動の記録である“地底の怒り”、三越争議における女子従業員の闘い“ぶどうばん”等の幻灯記録映画を大衆のなかに紹介すると共に、全国労働者の闘いの中で経験した行動を統一するための歌声を普及するため、文化工作隊を編成した。この「行動のための具体的な記録写真」と歌声指導が、二百日にわたる大衆の自発的行動を呼び起こしたと信ずるものである^{xix}。

日鋼室蘭労組の幻灯活動の重要なきっかけとなったのは、おそらく6月下旬に来訪した北三連オルグによって、解雇反対闘争の勝利の記録である幻灯『地底の怒り』が紹介されたことだったと考えられる。先述したように、従来は大半が積極的な労働運動とは無縁だったとされる日鋼室蘭の労働者と家族に対して、争議のノウハウを伝達するのみならず、争議の生々しい体験を共有する感覚を与えることで、闘争する主体としての自覚と自信を培う役割を、『地底の怒り』は果たしたといえる。そして、幻灯を媒体とするこの体験の交流／共有の感覚は、その後製作された『嵐ふきすさぶとも』を持参して全国を巡ったオルグ隊によって、さらに他へと広がっていった。

先行する『激斗63日』『地底の怒り』といった炭鉱争議幻灯と『嵐ふきすさぶとも』は、低賃金と過重な労働に苦しんだ果てに、会社側の経営合理化によって解雇される労働者の苦境、怒りと悲しみを強く訴えつつ、ストライキ、デモ、ピケ、ロックアウトを突破しての強行就労といった争議行為の数々、また、ストライキ中の生活対策に取り組む主婦の奮闘や、外部団体の支援などの、写真とテキストによる記録を積み重ねて提示する。その一方で、会社側の切り崩し工作はじめ、不法行為の数々を告発する、という基本的な内容を共有している。しかし、両者の間の重要な差異として、『嵐ふきすさぶとも』の台本が、たんにナレーションを読み上げるのみならず、『民族独立行動隊の歌』をはじめ、多数の労働歌のコーラスもしくはハミングの挿入を、全編にわたって指定している点がある。【図】



【『日鋼室蘭首切反対斗争記録 嵐ふきすさぶとも』第2巻説明台本（神戸映画資料館蔵）頁上部に労働歌のコーラスやハミングの挿入が指示されている。】

労働運動の経験の浅い日鋼室蘭の労働者が、本格的な団結と闘争に臨むにあたって、新しくもたらされた労働歌と幻灯というふたつのメディアが重要な役割を果たしたことは先に述べたが、『嵐ふきすさぶとも』はその両者をいちはやく融合した試みでもあり、以降、社会運動に関連する幻灯において「うたごえ」は重要な構成要素のひとつとなる。幻灯の解説台本にコーラスやハミングの挿入が指定されている場合、ナレーション担当者とは別に、合唱担当者が上映に立ち合うこともあったが、幻灯に挿入される労働歌は、大半が当時の労働者の間で絶大なポピュラリティを獲得していたものであり、幻灯を見る観客も、しばしば上映者に促されて、もしくは自発的に「うたごえ」へと参加していた。

第1巻は組合分裂の直前、第2巻は争議妥結直後に完成した『嵐ふきすさぶとも』は、外部支援を獲得するための教育宣伝プロパガンダの枠を超え、ほぼリアルタイムで進行する争議を、内部の混乱や当事者の感情の動揺も諸共に伝える貴重な記録となっている。のみならず、写真、うたごえ、生活記録、詩といった、文化運動によって獲得されたささやかな文化資源を効率的に統合し、他に向けて提示しうるメディアであるという幻灯の特性を活かした作品ともいえる。運動の当事者が肉声で解説を加え、ときに「映す側」と「観る側」の境界を消失させるような形で、頻繁に合唱やシブプレヒコールが挿入されるといふ幻灯独特の上映形態に、スクリーンに映し出される映像を、「過去の記録」としてのみ

ならず、「現在進行形で体験しうる出来事」とも感じさせ、観客を没入させるポテンシャルが備わっていた可能性も注目に値する。

戦後社会運動と幻灯の関わりについては、いまだに知られざる部分、語られざる部分がありすぎる。しかし、1950年代の「運動のメディア」としての幻灯が担っていた、たんなる「記録」とも「プロバガンダ」とも異なる、複雑多様な機能と意味については、日鋼室蘭争議における幻灯活動に注目することによって、その一端なりとも伺い知ることができるだろう。

【付記】 本稿は、早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点平成24年度公募研究「『映画以後』の幻灯史に関する基礎的研究」（研究代表者：鷺谷花）の成果報告である。執筆に際して、神戸映画資料館に資料閲覧のためご協力いただき、また、広田義治氏からも貴重な証言ならびに資料のご提供をいただいた。記して深謝する。

註

- i 文部省「本省幻灯教育施設ノ沿革」（1941年）。権田保之助『娯楽教育の研究』（1943年）、『権田保之助著作集 第三巻』、文和書房、1985年、317頁より引用
- ii 労働省、中央労働学園『労働教育展覧会関連資料』、1948年
- iii 「はしがき」、労働省労政局労働教育課『労働パンフレット No. 14 幻灯画の作り方』、1951年
- iv さかざき・つねろう「富士も怒れ！！日本の幻灯活動の展望」、『ソヴェト映画』1952年12月号（第3巻第12号）、36頁
- v 最高裁判所事務総局『刑事裁判資料第148号 労働関係刑事事件判例集（第七輯）』、1960年6月、513-515頁を参照。
- vi さかざき、前掲書、36頁
- vii 日本幻灯文化社／関西幻灯センター「労働組合の幻灯活動」、発行年不詳、神戸映画資料館蔵
- viii 『われらかく闘う 激斗63日』説明台本、神戸映画資料館蔵
- ix 舩谷新太郎「幻灯作りの記」、永丘智郎編『日かげの労働者』、三一書房、1957年、228頁
- x 谷川義雄「日本のスライドについて一岡田嘉子さんへの手紙一」、『視聴覚教育』1955年12月号（第9巻第14号／通巻97号）、34-35頁
- xi 日本労働総評議会編『現代文化講座』、駿台社、1956年、167頁
- xii 日本共産党中央委員会宣伝教育部『宣伝の手引 下巻』、新日本出版社、1957年、554-55頁
- xiii 現在は「広田義治氏寄贈資料」として北海道労働資料センターに所蔵されている。
- xiv 以下、日鋼室蘭首切り反対闘争の経緯については、主に鎌田哲宏・鎌田とし子『日鋼室蘭争議 三〇年後の証言—重化学工業都市における労働者階級の状態Ⅱ—』（御茶の水書房、1993年）及び広田義治編著『1954年日鋼室蘭争議の記録 日鋼労働者と主婦の青春 私説日鋼室蘭争史』上・下巻（光陽出版社、2001年）を参照した。
- xv 「教宣部文工隊活動報告書」、1954年7月3日、北海道労働資料センター所蔵広田義治氏

寄贈資料

- xvi 筆者による広田義治氏へのインタビューより（2012年8月20日、室蘭）
- xvii 『1954年日鋼室蘭闘争の記録』上巻の190-192頁の記述を参照した。
- xviii 『1954年日鋼室蘭闘争の記録』下巻、439頁
- xix 前掲書、616頁